

論文

戦争体験画に関する考察 (1)

——現代社会の中に作り出される「動き」——

Consideration on Drawing War Experiences part 1: “Movement” created in modern society

吉田 功

桐蔭横浜大学法学部

(2021年3月16日 受理)

【目次】

- I. はじめに
 - II. 戦争体験画の特徴と特性
 - 1. 体験画の募集と活用
 - 2. 資料としての価値
 - 3. 比較からみる戦争体験画の特性(以上、本号)
 - III. 戦争体験画の意味と「動き」
 - 1. 体験画をめぐる関係性
 - 2. 主催者側の「大きな問いかけ」
 - 3. 体験者と体験画
 - 4. 体験画をめぐる共同作業
 - IV. まとめ
- (45号掲載予定)

I. はじめに

戦後、各地の放送局や資料館、市民団体は戦争体験者に自らの戦争体験を絵に描いてほしいと呼びかけ、それをもとに放送、出版、展示などが行われてきた。その数は資料館などで保管されているものだけでも5000枚以上に上っている¹⁾。これらの絵を描いたひとは、ほとんどが絵筆など握ったことなどのない、いわゆる一般の人々であり、これまで戦争体験を他人に話したことのないひとも多かった。本稿ではこれらを「戦争体験画」²⁾と位置付けて、その意味と可能性を整理していきたい³⁾ (以下「体験画」とする)。

NHKの地域放送局でも、こうした「体験画」の作成を戦争体験者に呼びかけ、募集する企画を行ってきた。このうち沖縄放送局の企画について、筆者も係わり、取材や番組制作を行った⁴⁾。最初、体験画を眺めているだけでは描き手の意図やその意味を把握できないものも多かった。取材の過程で、描き手と詳しく話をすることによって初めて、戦争に直面したときの恐怖、驚き、悲しみといった

感情を、共感することとが可能になった。ここに、体験画のひとつの特性があると考えられる。

絵を前にして、取材を始めるとまず、様々な疑問が生まれた。「これは誰でしょうか?」「ここはどこでしょうか?」「ここで何をなさっていたのでしょうか?」というような、絵に即した非常に具体的な質問をすることになった。そしてその問いを重ねるうちに、その内容は変化していった。「この時はかなり暑かったでしょうか?」「お腹が減っていたでしょうか?」「この時、どんな気分だったのでしょうか?」というような、自分の身体感覚を伴った質問になっていったのである。

この問いに、描き手である体験者は、全てに対して即答してくれたわけではなかった。「どうだったろう、何も感じなくなっていたのかもしれない」「怖さなんてなかったなあ、どう思っていたのだらう」など、その当時を思い出し、考えながら答えてくれることも少なくなかった。当然のことながら、戦争は半世紀以上昔のことであり、体験者がすべてのことを鮮明に覚えているわけではない。問いをきっかけに体験者が自らの戦争体験をあらためて思い起こし、整理していく作業が始まったと考えられる。そして、これらのやりとりを通して、非体験者である筆者も、当時の状況を具体的に想像し、結果として強く共感していくことが可能になったのではないかと考えている。

ここで重要なことは体験画を前に話しあうことによって、戦争を体験していない筆者と、描き手である体験者は、まったく立場や方法は違ったが、ひとつの戦争の事象とともに向き合うことができたということである。もちろん、体験者と非体験者の間には厳然とした大きな壁があり、その痛みや悲しみを理解できたということでは全くない。しかし、体験画は、体験者と非体験者の間での対話を新しく作り出した、と考えるのである。この対話を、現代社会において、戦争という過去の出來事にあらためてアプローチしようという

「動き」と規定したい。

体験画の募集から展示・放送というプロセス全体でみていくと、こうした「動き」が様々な段階で生み出されていたととらえることができる。例えば、体験画の募集は、放送局や博物館などの主催者が、多くの戦争体験者に絵に描いてほしいと広く「呼びかける」という「動き」であったといえる。その呼びかけに応じて、体験者たちが一人一人、あらためて自らの体験にアクセスし、絵筆を握り、キャンパスや画用紙などに使って、絵を描くという「動き」が生まれたといえよう。そして、絵に描かれたさまざまな事象について、描き手である体験者と、取材に訪れた非体験者たちとの間には、対話がうまれ、それぞれの中で深められるという「動き」が作り出されていたと考えられる。本稿では、これらの「動き」を詳しく分析し、その意味を整理していきたい。

戦争体験とは、本来、体験者ひとりひとりに固有のものであり、それぞれの頭の中にしか存在しない。確かに悲しみや恐怖、そしてそれらを抱えて戦後を生きてきた痛みは他人には伺い知ることとはできないかもしれない。しかし、非体験者でも自分の身体感覚を使って、ひとりひとりの体験者の状況を想像し、近づこうとすることは可能である。体験画をきっかけとして生まれた「動き」はこうした営みの助けになりうるだろう。これらを積み重ね、活発化することによって、個人の中に閉ざされていた戦争体験を、社会全体としてもう一度、とらえなおし、再構成することが可能になると考える。これらは、ひとりひとりの戦争体験を、社会全体において共有できる「戦争経験」⁵⁾として定着させていくひとつのヒントになる。本稿ではそうした可能性を探っていきたい。なお、本稿で引用した絵⁶⁾の多くは、原画がカラーである。

II. 戦争体験画の特徴と特性

1. 体験画の募集と活用

体験画はそもそもどのように形成されていたのか。体験画の多くは市民団体や各地の資料館、新聞社や放送局などの募集に応じる形で、戦争体験者が描いたものである。これらの募集は全国規模ではなく、地域限定で行われているのが一つの特徴である。例えば、1981年には「大阪空襲の体験を語る会」、また1983年には「静岡市平和を考える市民の会」、2003年には墨田区のすみだ郷土文化資料館によって「東京空襲」の体験画の募集が行われた。「東京空襲」では300枚以上の絵が集まり、これまでに10回にわたって展示、画集の発行なども行われている⁷⁾。こうした体験画募集、展示事業の中でも、最も規模が大きく、また組織的に行われてきたものは、NHK各地域放送局が行ったプロジェクトである。これらは各放送局がそれぞれ独自に企画し、地域の自治体や新聞社、資料館と協力しながら実施されてきた。

NHKはこれまで6つのプロジェクトを実施している(表)。これらのプロジェクトで最初に行われたものは1974～75年に広島局で実施されたものである。自身の原爆体験を描き残したいと、広島市に住む小林岩吉さん

が1枚の絵を局に持ち込んだことがきっかけだった。この絵をローカル放送で伝えたことをきっかけに、広島局には多くの絵が寄せられはじめ、それに応じて、広島局は「市民の手で原爆の絵を残そう」という呼びかけを放送で始めた⁹⁾。この呼びかけは、テレビニュース、ラジオの番組のほか、告知スポットでも、繰り返し続けられた。この結果、2000枚以上の絵が集まり、展示会も複数回実施された。これは、広島県内はもちろん、日本全国、全米各地でも開催され、大きな反響を呼んだ¹⁰⁾。これらの絵は広島平和記念資料館に寄贈され、保管管理されることとなった。

これに続いて、長崎局や沖縄局などでもプロジェクトが実施された。地域放送局の特性を生かし、夕方に放送されるローカルニュースにおいて、募集の呼びかけに応じた絵を紹介している。広島局と同様に、これらの企画は何度も放送され、また募集を繰り返されるというスタイルがとられた。放送による「呼びかけ」が継続されたといえよう。集まった絵についての展示会を行い、絵を収録した出版もなされた¹¹⁾。また、どのプロジェクトでも集まった絵は、終了後に各地の資料館に寄贈、保管されている。各資料館では、地域の教育などにも利用できるように、貸出などを行っている。また、現在はその多くがウェブなどにも公開されて、だれでも閲覧すること

表 NHKが実施した戦争体験画プロジェクト⁸⁾

| 実施年 | プロジェクト名 | 局名 | 共催 | 応募数 | 絵の保存先 |
|---------|--------------|-----|-------------------------------|-------|----------------------|
| 1974～75 | 市民の手で原爆の絵を | 広島局 | | 2,225 | 広島平和記念資料館 |
| 1974～75 | (市民の手で原爆の絵を) | 長崎局 | | 355 | 長崎原爆資料館 |
| 2002 | 被爆者が描く原爆の絵 | 広島局 | 広島市、広島平和記念資料館、中国新聞社 | 1,338 | 広島平和記念資料館 |
| 2002 | 被爆者が描く原爆の絵 | 長崎局 | 長崎市、財団法人長崎平和推進協会、長崎新聞社 | 341 | 長崎原爆資料館 |
| 2004～06 | 体験者が描く沖縄戦の絵 | 沖縄局 | 沖縄県平和祈念資料館 | 547 | 沖縄県平和祈念資料館 |
| 2018 | 樺太・千島戦争体験の絵 | 札幌局 | (後援：全国樺太連盟、千島歯舞諸島居住者連盟、北海道大学) | 110 | 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター |

が可能になっている。ここでは画像だけを紹介するのではなく、いつ、どこで、何を描いたものなのか、各放送局が描き手から聞き取った情報も併せて掲載している。

これらの情報をもとに体験画はアーカイブ化され、戦争の実相を知る上での貴重な歴史資料となっている。例えば、広島平和記念資料館には現在およそ 3500 枚の体験画が保管され、画像と情報はデータベースとして整理されている。水を求めて人々が集まってきた川や橋、大量の遺体が焼かれた各公園など詳しい地域別の実態、原爆投下後に市内に降った「黒い雨」や市内を焼き尽くした「火事嵐」などをビジュアルとして見ることができる¹²⁾。

2. 資料としての価値

体験画の資料としての価値は戦争のさまざまな状況を住民側から、視覚的に記録している点にある。確かに先の大戦における視覚的な資料としては、米軍による動画、写真などの映像も残されている。しかし、その量は極めて限られている。例えば、広島原爆投下については、米軍の爆撃機から撮影したものだけで、地上の広島市内の様子をとらえた資料はすべて米軍占領後のものである。原爆投下後の広島市内において、どのような変化が起こったのか、まったく映像資料は残っていない。また、これらの資料は攻撃した米軍側の視点でのみ記録されたものである。そこでは、原爆を落とされた側、住民の存在は消し去られてしまっている。こうした資料だけに依拠し、戦争を理解しようとしても、きわめて表層のかつ一面的なものにしかなりえないだろう。「広島への原爆投下」というと「キノコ雲」といったステレオタイプの認識しかできず、その核兵器の威力の大きさ、人間への影響、その被害の実態を把握することはできない。

体験画はこうしたイメージとは異なる像を結ぶ。1974 年から NHK 広島放送局などが募集し、広島平和記念資料館が保存管理して



絵1 広島平和記念資料館蔵

いる「市民が描く原爆の絵」の一部から見てみたい。

絵1は松室一雄さんが描いた市内中心部の上空である。原爆投下の1時間後、火柱が上がり、吸い上げたものがもうもうとわきあがる。この状況を、松室さんは「恐ろしくもありきれいであった」を書いている¹³⁾。なにが起こったのか、当時、人々はまだ状況をつかめずにいた様子が浮かび上がる。

絵2は内田栄一さんが描いた市内の人々の様子である。地表の温度は摂氏 3000 度まで上昇、内臓や目が溶け出したという。その中で、内田さんは座り込む三人の中学生をみた。「早く逃げよう」と声をかけたら「僕は歩けない」との声。行き過ぎると後方で「お母さん……」という絶叫が聞こえ、中の少年の目が飛び出て、垂れて左手で受け止めていたという¹⁴⁾。想像を絶する苦痛に喘ぐ人々の姿が浮かびあがる。

絵3は野村英三さんが描いた原爆投下から2時間後の様子である。熱線と爆風によって市内のいたるところで火の手があがった。一



絵2 広島平和記念資料館蔵



絵3 広島平和記念資料館蔵

且燃え広がった爆風が一気に逆流したことで勢いを増す。中心部から少し離れたところでこの炎をみた野村さんは、ほかの人たちと恐ろしさで茫然とするしかなかったと述べている¹⁵⁾。絵は、広島街が一面、焼け野原になったのかという理由を物語っている。

原爆は、その爆発によって被害をもたらしただけではない。なんの前触れもなく投下されたのち、地表を灼熱地獄と変え、熱線と爆風によって炎に巻き込んだ。体験画は、まったく予想もしない惨禍の中で、人々が驚き、恐れ、苦しんだ様子を克明に記録している。

体験画が映し出す戦争の姿は、米軍による映像資料とは全く異なるものといえよう。これは、広島だけでなく、地上戦が行われた沖縄戦や空襲を受けた他の地域においても同様である。これらは戦争の表層的なイメージを打ち碎き、その絶望的な悲惨さと理不尽さを現代に伝える貴重な資料といえよう。

3. 比較からみる戦争体験画の特性

体験画を資料として考える際には、描写に

において現代の史観が混在し、必ずしも当時の様子を忠実に再現したものではないことを考慮する必要があるだろう。ただ、体験画は、ほかの絵画とは大きく違う資料としての特性を持っている。その特性を考えるために、戦争を描いた他の絵画と比較してみたい¹⁶⁾。

戦時中には日本軍の委嘱を受けて、プロの画家が描いた作品群や、戦後に作られた絵画作品などがある。前者の中では藤田嗣治《アツ島玉砕》など「作戦記録画」と、後者は丸木位里・俊夫妻《原爆の図》などが非常に有名である。井上裕之（2020）は、体験画とこれらの絵画との違いは、描き手が必ず現場に立ち会っている点にあると述べている。「作戦記録画」も事後に画家たちが訪れ、情報などを収集して描いている場合も多い。また、《原爆の図》も丸木夫妻が戦後、広島を訪れ、体験者の証言、資料その他に接している。

しかし、どちらも描き手は、戦争時に現場に立ち会っていない。この「立ち合い」という点に関して、井上は「証拠性」という概念で整理している¹⁷⁾。「証拠性」は言語学上の概念で、話し手は、実際に自分が見たかどうかで、その事象の伝え方を文法上で表し分けているという。井上は、表現の手段が言語であれ絵であれ、人はそれらを日常的に区別していると述べている。「証拠性」を有したものは、言語であれ絵であれ、受け手にとっては「それは実際に見たことなのか？」という疑問に答えてくれることにつながる。すなわち、体験画について、受け手は描き手に、体験した戦争について詳しく聞くことができる。

一方、「作戦記録画」や《原爆の図》は、画家たちに体験していない戦争の詳細について聞くことはできない。もちろん《原爆の図》、「作戦記録画」とともに非常に芸術性の高いものであり、絵画作品として鑑賞する対象であろう。ただ、描き手がその場に立ち会っていないという点で、資料としての「証拠性」が乏しいといわざるをえない。

もうひとつ、体験画の特徴は、「付加情

報」を内在させている点であろう¹⁸⁾。付加情報とは、この絵は「いつ」「どこで」「何を」描いたものであるかを示すものである。前述したように、証拠性を持たない絵画作品にはそもそもこうした情報は含まれていない場合が多い。これらはあくまでも画家による芸術作品であり、その意図は体験画とは全く異なっているからである。ただし、体験画においても、こうした情報は体験画の描き手が言語化し、表記しているとは限らない。なぜならば、体験者にとってこれらは自明のものであり、特に言語化する必要はないからである。付加情報を言語化したのは、体験画を募集した放送局や博物館など主催者である。体験者に対して、詳細な取材や調査を行い、付加情報を言語によって表記する。

体験画は、これらの付加情報を読み解くことによって、受け手が絵の意味するところを理解できるようになる。つまり描き手によって描かれた時点では、受け手はその主旨を受け取るのは難しいといえよう。これらの絵については、受け手のスタンスとして、「絵画を見て知る」というだけでなく、「絵画を通じて知る」ということを必要とする¹⁹⁾。言い換えるなら、体験画を通じて、描かれたものの向こう側にある戦争の深層に、想像力をもってアプローチする努力が求められるということである。体験画は、他の絵画作品と違って、描かれたものをそのまま眺めるのではなく、主催者によって言語化された付加情報などを手がかりに、受け手が主体的に学びとろうとする意識を伴ってはじめて、その価値を発揮できる資料といえるだろう。

【注】

- 1) 後述するが市民団体、資料館によるものが500枚以上、NHKプロジェクトによるものがおよそ5000枚収集されている〔井上（2020）75-78頁〕。
- 2) こうした絵は、「原爆の絵」（NHK編1975）、「空襲体験画」（すみだ郷土文化資料館監修

2005) など、いくつか呼び方があるが、本稿では地域を限定せず、全体を「戦争体験画」と名付ける。また、本稿では公開を目的に描かれ、現在も資料館などで保存、展示されているものを分析の対象とする。

- 3) 戦争体験画に関する論考には、小沢節子(2002)、米山リサ(2005)、直野章子(2015)、田中禎昭(2016)、井上(2020)などがある。小沢、米山、直野には広島「原爆の絵」を中心とした論考がある。田中には東京空襲に関する論考があり、井上には戦争体験画全般の論考がある。井上は、筆者と同じNHK沖縄放送局での経験と言語学の知見を踏まえた分析を行っている。本稿ではこうした論考を踏まえ、体験画の意味を、現代社会における「動き」という観点から深めていく。
- 4) 筆者は2004年当時、NHK沖縄放送局のディレクターとして、本稿でも紹介する「体験者が描く沖縄戦の絵」プロジェクトにかかわり、特集番組の取材、番組制作などを担当した。
- 5) 成田龍一(2020) 17-24 頁
- 6) 絵の引用に関しては個別に所蔵館への事前許可を必要とすることを留意されたい。
- 7) 井上(2020) 78 頁、田中(2005) 154 頁
- 8) 井上(2020) 75 頁
- 9) NHK 編(1975) 89-93 頁
- 10) NHK 出版編(2003) 102-109 頁
- 11) それぞれについては、NHK 編(1975)、NHK 長崎放送局編(2003)、NHK 広島放送局編(2002)、NHK 沖縄放送局編(2006)に詳しい。
- 12) 詳しくは、広島平和記念資料館「原爆の絵」 http://a-bombdb.pcf.city.hiroshima.jp/pdbj/search/col_pict 2021.3.13 閲覧
- 13) 上記・資料番号 GE0139 および参考番組 NHK 広島(2002)
- 14) 上記・資料番号 NG103-03 および参考番組 NHK 広島(2002)
- 15) 上記・資料番号 NG029-03 および参考番組 NHK 広島(2002)

16) 井上(2020) 79-80 頁

17) 同上、82-83 頁

18) 同上、78-79 頁

19) 田中(2016) 141 頁

【参考文献】

- ・ 井上裕之(2020)「戦争体験画とはなにか—戦争画などとの比較から考える—」『放送研究と調査』NHK 出版 74-89 頁
- ・ 斎藤亜矢(2014)「ヒトはなぜ絵を描くのか」岩波書店
- ・ 小沢節子(2002)『『原爆の図』描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』岩波書店
- ・ すみだ郷土文化資料館監修(2005)『あの日を忘れない 描かれた東京大空襲』柏書房
- ・ 田中禎昭(2012)「語りうる戦争体験、語りえない戦争体験」『戦争の子ども』を考える』平凡社
- ・ 田中禎昭(2016)「東京空襲の記憶をいかに伝えるか—体験画による記録の方法とその意味—」『描かれた東京大空襲 体験画図録』すみだ郷土文化資料館
- ・ 田中雅一など編「トラウマを生きる」京都大学学術出版会(2018) 1-30 頁
- ・ 直野章子(2015)「つかみ損ね体験の痕跡—トラウマとしての原爆体験」『原爆体験と戦後日本 記憶の形成と継承』岩波書店
- ・ 成田龍一(2020)増補『戦争経験』の戦後史 語られた体験／証言／記憶』岩波書店
- ・ 水島久光(2020)「戦争をいかに語り継ぐか「映像」と「証言」から考える戦後史」NHK 出版 251-266 頁
- ・ 屋嘉比収(2009)「沖縄戦、米軍占領史を学びなおす」世織書房
- ・ 米山リサ(2005)「証言活動」『広島 記憶のポリティクス』岩波書店 133-166 頁
- ・ NHK 沖縄放送局編(2006)『沖縄戦の絵 地上戦 命の記録』日本放送出版協会
- ・ NHK 出版編(2003)『ヒロシマはどう記録されたか NHK と中国新聞の原爆報道』

日本放送出版協会

- NHK 長崎放送局編 (2003)『原爆の絵 ナガサキの祈り』日本放送出版協会
- NHK 広島放送局編 (2002)『原爆の絵 ヒロシマの記憶』日本放送出版協会
- NHK 編 (1975)『劫火を見た 市民の手で原爆の絵を』日本放送出版協会

【参考番組】

- NHK 沖縄 (2005)『沖縄フリーゾーン「その時 私は戦場にいた」—体験者が描く沖縄戦の絵—』総合・2005年6月3日・沖縄県域
- NHK 長崎 (2002)『原爆特番 伝えたい…平和の願いを 世紀を超えて』総合・8月3日・長崎県域
- NHK 広島 (1975)『原爆ドキュメンタリー—市民の手で原爆の絵を』総合・1975年8月6日・全国
- NHK 広島 (1982) NHK 特集「原爆の絵 アメリカをゆく」1982年8月6日全国
- NHK 広島 (2002)『NHK スペシャル 原爆の絵～市民が残すヒロシマの記録～』総合・2002年8月6日・全国
- NHK 広島 (2019)『NHK スペシャル「“ヒロシマの声” がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館～」』総合・2019年8月6日・全国